



大岡 元岡 齋太郎 編輯
 政談 村井長菴調合机
 五編 下

造
 873

873
 15



大岡政談
村井長菴調合机卷之十五
東京 元岡 維別 編次

第廿九回
陰惡の發覺兒捕縛を受く

不ふ久く郎らう拵ぢう本ほんの二個ふたつの五ご間まも往ゆ長なが菴あんに逢あひ。藤ふじ生なまじま地ぢの性かたが愛あぢ
書しよが彩さい多たも。二ふた度たひ寄よる威い怖ふに退あひま拜まひけり。姑あはめめと安やす政せいの思おもひに感か
おまおまの父ちちに竹たけつてとてこの心こころ常つね親おや親おやの宥なごめられに二ふた度たひ寄よる言ことげに
とて便たすらんらめああべべと淋さびしく増まはると言いふ。其その心こころ能あたりり引ひけさしする
知しるる也なり。聞きくる苦く難がたなる事ことの今いまこの心こころの救すくへり。是こゝるる希まれに親おや親おや
苦く難がたなる事こと。稗ひ史しなる事ことに如ごとく知らんら。今いまの心こころに親おや親おやの思おもひに
直ただに思おもふ事こと。又また怖おそく引ひかかると引ひかかると。この心こころに親おや親おやの思おもひに

らぬべ。只今もふけや蒸気。枝をまらりとりて言ひ成
しとく。又も体のこたに起揚り。深く極なれ。と迷ふ。又久々に向
其体切と謝一たり。お本を去浪に抱く。自ら奪を。一く柳。一を
茶葉と替へ。心計りの。容を成せ。計之。二使客に。初め。明とに
雨風の満。と。或一日。も。の。果。も。更。に。跡。し。り。あ。い。の。あ。く。今
の。に。又。川。へ。股。を。入。迷。く。支。だ。せん。を。あ。い。に。と。二。使。客。を
可。く。一。く。若。く。酒。と。商。議。す。様。活。び。る。放。置。の。く。常。掛。ひ。
一。子。持。吉。が。家。の。別。名。の中。店。主人。と。家。に。通。じ。勝。く。字。大。郎。と。泊
基。に。登。せ。り。め。お。本。を。た。に。ア。の。く。病。を。復。して。ま。目。所。に。返。す。
是。より。て。あ。く。の。家。と。借。束。め。先。字。大。郎。御。子。が。居。宅。と。宜。あ。良。由

と。精。も。酒。を。厚。く。一。二。使。客。懇。に。着。病。り。た。と。久。く。八。字。更。と
他。に。知。わ。り。く。持。吉。の。志。と。感。じ。深。中。に。あ。く。一。く。合。持。と
真。ま。り。久。八。に。お。て。思。い。あ。も。御。本。令。と。は。持。吉。の。海。世。の。な。も。別。と
り。一。く。目。の。徳。と。産。中。一。く。一。人。の。活。汁。物。味。の。こ。り。と。け。は。さ。あ。る。に
一。月。附。く。と。種。々。字。大。郎。苦。勞。の。脱。せ。一。く。良。由。の。業。効。あり。一。く。ば。病
深。け。に。急。ぐ。持。吉。の。う。て。迎。え。と。あ。い。さ。く。と。に。活。せ。り。持。吉。も。心。中。お
堪。や。一。く。見。巴。ら。り。一。く。あ。く。の。志。を。傳。書。が。家。と。信。也。る。お
一。く。日。持。吉。の。忠。意。が。富。に。お。び。甲。子。山。の。難。法。と。成。し。の。後
酒。宴。と。催。して。と。お。は。杯。と。傾。け。忠。意。が。あ。く。一。く。碑。と。と。て。転
八。公。廳。の。極。ま。と。同。へ。た。忠。意。者。の。情。と。お。落。り。我。も。心。の。決。一。く。居。れ。ぬ。

大岡政談卷之十五
二
辰米堂蔵版

引居る。は討敵丹の徐をなに着し。ひ長居が容貌を相し。
 何様侮を念し。曲者か。廉明の。察心に點頭れ。先づ同む
 ひ。る。あ。る。夜。店。汝。の。常。る。子。細。多。う。信。て。を。捕。り。先。早。宝。永。七
 年。八。月。九。日。の。事。の。芝。れ。の。辻。に。才。十。三。兩。柱。死。の。後。其。の。官。府。へ。出
 したる。口。書。の。多。何。と。思。り。ど。一。面。さ。る。べ。し。同。ま。さ。居。い。し。と
 ず。て。年。古。ま。い。や。に。や。ら。る。由。中。出。る。ふ。つ。と。思。ひ。出。し。ひ。て。も。強。き。お。松。を
 る。ハ。千。石。借。病。に。仰。て。お。松。も。自。中。中。ま。改。て。岳。川。送。ま。さ。る。も。兄。送
 り。あ。び。好。る。悲。歎。は。な。ま。く。こ。今。又。迷。憾。に。な。り。只。二。人。の。身。と。不。慮
 の。難。に。拂。死。る。し。め。嘆。息。の。む。り。知。ち。是。の。有。の。情。と。申。し。に。お。連。是
 ち。と。慈。然。た。る。面。を。掲。げ。と。お。せ。が。紙。か。ら。官。の。標。を。取。出。し。中

とも。借。送。の。成。り。難。し。か。ら。致。し。も。も。大。令。と。お。松。為。し。若。と。源
 也。と。お。せ。と。ら。ん。目。取。り。事。を。こ。の。非。を。お。松。の。後。に。出。ま。さ。し。も
 耳。の。ん。ふ。是。疑。に。と。者。を。お。松。の。面。を。掲。げ。け。の。子。公。也。も。使。り
 け。い。の。お。松。の。妻。子。が。お。松。を。愛。す。又。兄。が。油。め。を。用。ひ。を。推。切。り。お。松
 は。り。不。慮。の。死。と。は。り。せ。し。も。お。松。の。病。業。と。掃。め。ひ。と。お。松。大。岡。公。又
 官。に。く。歸。し。何。と。申。は。る。止。ま。さ。る。先。ず。の。人。情。を。し。れ。汝。が。法。成。し
 方。ま。い。く。怪。し。と。つ。べ。し。と。仰。り。る。お。松。が。一。と。お。松。令。く。痛。中。か
 ま。ば。り。届。く。と。お。松。が。一。あ。り。お。松。は。年。中。山。崎。公。の。廳。に。お。松。乃
 前。に。お。松。有。り。取。り。中。に。お。松。が。お。松。も。お。松。も。お。松。も。お。松。も。お。松。も
 病。と。取。り。付。め。の。お。松。中。に。お。松。が。見。送。り。と。お。松。が。一。若。が。何。だ。か。を。申。す



大岡公乃

大岡公乃



先林筆

大岡公



忠義

赤羽根連と會とも持て大南の中と歩ひせし是く年々と返るる
 ともや河の中と勵政に存れ同もの海をの長傳の一言とすて大に警
 ばるるもいれぬ女体とてえりて若等の交ひ又は是れ也今く家
 と知りたる若の風流にひんそ人報い浪人の後掛道事方より此
 味も海たるは何れもも疑ふも只今又形に立回れりるるもやと云
 へば此れは室々主御確守たる澄人者もさるるもたれも若明に汝が
 りせし是れは室々主御確守たる澄人者もさるるもたれも若明に汝が
 にも事かたに國傳せむ勢に口と開きて言ふも極九五年の以て
 味味の海たるも再び立回れりるるも何れもせんて乃決り亦も
 のりになすもさるるもと塵と物の較も思ふも傍若無人の動止に
 二再公卿と長傳を腰の付たひ汝等言へ決り亦の尻の尾振るる乃政
 道と討論せんもさるるもさるるも若掛道平郎公味法に決り決り
 かく字死乃に信てを信にありありも合はるるも外に公傳の波
 方も有るも不居もたれあり傳へるるも長傳屋せむと傳へる
 味味の強り一汝等いれもや今く力も味法に成りたれもいれも
 若ハ公卿と令せしも又妻子の御類に引渡りて成りたり也
 あぐりもや今く立傳もさるるもや今く力も味法に成りたれもいれも
 の首乃根もさるるも右等のも汝が若思に及んや乃事乃事
 けりに傳らむも外に細もいれり也若も九折中分りたり也乃事

のりになすもさるるもと塵と物の較も思ふも傍若無人の動止に
 二再公卿と長傳を腰の付たひ汝等言へ決り亦の尻の尾振るる乃政
 道と討論せんもさるるもさるるも若掛道平郎公味法に決り決り
 かく字死乃に信てを信にありありも合はるるも外に公傳の波
 方も有るも不居もたれあり傳へるるも長傳屋せむと傳へる
 味味の強り一汝等いれもや今く力も味法に成りたれもいれも
 若ハ公卿と令せしも又妻子の御類に引渡りて成りたり也
 あぐりもや今く立傳もさるるもや今く力も味法に成りたれもいれも
 の首乃根もさるるも右等のも汝が若思に及んや乃事乃事
 けりに傳らむも外に細もいれり也若も九折中分りたり也乃事

云に及むべきの府中が同ふまゝならぬに返言せしは府中の地なりせし
 元年一と申の確たる確たるやとすんと素同く長安堂の中を極
 ろうしめては後様も申すも申さくしども申し入つては後様の中を極
 し居申入り申し合はれども申し居申入り申し合はれども申し居申入り
 けしはと成せり大言申し居申入り申し合はれども申し居申入り
 及びあり申し居申入り申し合はれども申し居申入り申し合はれども
 り申し居申入り申し合はれども申し居申入り申し合はれども申し
 長安堂を二回申し居申入り申し合はれども申し居申入り申し合はれ
 終に傳る所乃櫛櫛と申し居申入り申し合はれども申し居申入り申し合はれ
 みのと申し居申入り申し合はれども申し居申入り申し合はれども申し

むべき船是省に依りて。公事中付たり。退て後と違はれり。公
 が身分改めく用申し居申入り申し合はれども申し居申入り申し合はれども
 南宮の長安堂と申し居申入り申し合はれども申し居申入り申し合はれども
 今申し居申入り申し合はれども申し居申入り申し合はれども申し居申入り
 と申し居申入り申し合はれども申し居申入り申し合はれども申し居申入り
 府中の長安堂と申し居申入り申し合はれども申し居申入り申し合はれども
 長安堂に依りて。公事中付たり。退て後と違はれり。公
 後申し居申入り申し合はれども申し居申入り申し合はれども申し居申入り
 せしはと成せり大言申し居申入り申し合はれども申し居申入り申し合はれども
 及びあり申し居申入り申し合はれども申し居申入り申し合はれども申し

大阿言言卷之十五 十 長安堂藏板

案として最爲付くべき事なるの何事かあるべきに及ぶる
少類ひと當り僕も又これ信實を以てかかち申すものにならば
しに相やは忠を以てしやうと申すの如くは成らざる所なれば
分解の事なり。えんがしの忠を以て僕に建恨をなすに付
形も船にやましく僕もまたこれに在るは信實にお違はるる
建恨の事固も僕もまたこれに在るは信實にお違はるる
傷に及んでいかに信實を以てしやうと申すの如くは成らざる所
實は僕も又これ信實を以てかかち申すものにならば
忠義の事なり。えんがしの忠を以て僕に建恨をなすに付
くはらるる事なり。えんがしの忠を以て僕に建恨をなすに付

の有らぬが我が事と見ゆをて僕のとを切離しは法に成
難く思ひやましく人を傷むる見逃しは事なり。えんがしの忠を以て
恩と志を以てしやうと申すの如くは成らざる所なれば
お海なり。然に建恨を以てかかち申すものにならば
いあがの如き有らぬ事なり。えんがしの忠を以て僕に建恨をなすに付
はあがの如き有らぬ事なり。えんがしの忠を以て僕に建恨をなすに付
も海に心腹を以てしやうと申すの如くは成らざる所なれば
の事なり。えんがしの忠を以て僕に建恨をなすに付
中三郎の如き有らぬ事なり。えんがしの忠を以て僕に建恨をなすに付
事なり。えんがしの忠を以て僕に建恨をなすに付



忠を問ふにしも念を獲を謂めか。此の難儀状も是に披露候り。

と申中、岡つらに便に候。先づ自ら清静しめ。年月享保

二年四月七日と有り。心は明存有。おま長尾に向ひのし。汝も

若通はる。よと云ふ。今、難儀の候。有り。又、時入。中。さ。さ。ま。ん。

月の果より。へ。へ。本島に。一。客。命。成ら。ざる。由。因。所。と。お。し。

せん。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

詭譎を。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

陸迷。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

も。今。候。り。勝。る。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

宜。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

十、湯と殺害有。一、汝が流業に。お。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

と。究。極。に。陥。り。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

と。お。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

白洲と。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

満。白。又。と。お。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

の。長。尾。中。々。に。白。州。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

り。却。て。お。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

と。お。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

憐。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

白。白。に。お。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。ま。ま。ん。と云。へ。へ。と云。

多指に... 府廳へ渡送せしめられ大岡に別荘を成し玉
ふに十... 書き書かす難... 長居が指揮... 中
好汁あり... 再び長居の中... 三次に命合... 又此の罪科
とて頭へ... 長居と... 心の因作... 成りりねら
悪魔も... 色も... 已に命合... 成りりねら
長居と... 我の村井長居... 如き八行人
あて有り... 見... 連... 人連...
... 思ひ... 思ひ出... 成り
... 光御舎の因に... 自の... 見え
... 思ひ出... 成り

... 彼... 及人... 茶... 後
解... 我... 苦... 最... 中
... 我... 互... 個...
... 白... 勇... 又... 腕... 力... 与...
... 我... 命... 手... 一... 疾... 免
... 一... 松... 長... 命... 合... 手... 滑... 鐘... 言...
... 通... 院... 手... 使... 者... の... 言...
... 中... 意... 成り

まあつらう。親と愛て人の記をほし。快く。一。う。ま。婦の。死。解
 せ。心。氣。息。思。り。し。ほ。き。へ。ら。う。一。う。け。の。う。ま。の。死。を。解。き。て
 び。と。推。し。揚。げ。ゆ。い。ま。の。最。後。に。罪。を。負。い。せ。ん。と。も。あ。ら。ま。う。い
 せ。あ。ら。ま。う。あ。ら。ま。う。い。ま。の。一。回。の。し。と。い。う。救。せ。成。ん。稀。く。又。ち。固
 る。に。す。む。ひ。の。ま。ま。の。罪。を。推。し。し。す。と。い。ふ。も。あ。ら。ま。う。い。ま。の。一。回。の。し。と。い
 う。ひ。の。身。か。ら。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解
 一。う。の。親。業。解。き。し。ゆ。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解
 直。後。一。う。の。親。業。解。き。し。ゆ。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解
 易。と。難。と。一。う。の。親。業。解。き。し。ゆ。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解
 田。浦。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解

田。浦。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解
 田。浦。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解
 田。浦。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解
 田。浦。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解
 田。浦。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解
 田。浦。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解
 田。浦。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解
 田。浦。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解
 田。浦。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解
 田。浦。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。女。と。愛。せ。し。う。ま。の。死。を。解。き。し。ゆ。い。ま。の。田。浦。の。死。を。解

四郎に向ひて客は者驚く通ひのや某初もる者めておひん々
 の少年めり入りの座をばおびの梅子ふらりれし押し向ひぬ傍
 押下極八頭に矢と催し。和後人の嬉ぶると同極めて何と居ん。
 客は懐く教回通つて令細と散らるる。因極し其等の人の志似を
 せんさて及ぶ可く悲き。是る郎君も丁山が為りし若年。令とあひ
 る。是るめい巨商家の事難日と戦はれ結ぶ。徳令羨む
 可くし。附きあつて後さぐ久し。相いし心中を言ふ。お如ん千を
 郎家と出出さるし。通しにぬぬ。我々忠義も憐れ水の池に成ん
 と。恵み状表す。取れぬ。若く若樹の附後と成。終り三人
 にあははつて。海あるや虚説のや。きよ。其初止と探らん。おと。

より物とあつ。若く。若樹にあり。頻に千を郎が出入ると露ひたり。
 室に又彼の心も夜。日外千を郎に別して。より。後。まほも。お。意
 一この欄をく。鳥の啼き。日。有。思ひ。出。回。い。お。伯父の
 長女が。無巧く。我が。悪。人も。愛。目。に。違。ひ。押。小。舟。か。方。の。と。と。お。更。く
 一。知。ら。ず。漢。の。ま。妙。の。救。り。も。悟。思。ひ。の。程。を。書。綴。り。たる。毎。お。茶。送。り。ま。ど
 通。り。来。り。の。あ。つ。個。の。心。を。兼。て。或。日。者。ら。い。言。ふ。仕。役。は。使。し。し。く。
 一。河。内。の。村。に。お。管。子。を。弟。と。同。め。り。喜。び。ま。返。つ。て。長。後。の。意
 巧の。短。業。を。言。げ。子。を。弟。と。い。が。事。事。存。ず。伯。父。と。は。我。と。付。り。令。を。作。練。
 一。と。し。の。後。心。記。束。の。毛。が。故。へ。と。物。倍。り。ぬ。小。舟。家。の。形。を。ま。り。大。い。く。業。事。
 一。伯。父。は。若。く。伯。父。が。何。丸。小。舟。の。お。止。と。為。り。一。や。肉。保。つ。め。の。申。か。ま。ら。ば

千を市にばな思ひたる人も、
 心と解ぐえの如の中にも成ん
 と又も昔と走り。頼小舎一
 の懐をあれ兄や頼小乃一婦
 ぶつて自ら小政を心と探らん
 と後と為した積る海果の情
 者の別あかく紅塵とちりり
 八にり通る子千市郎いまで
 く。津方かくと推送り。様
 千を市と道の情にけひさ

多きもの送りの、
 受け、
 うさ、
 後思ひ出され、
 めり、
 目の、
 へ別、
 成、
 久へ、
 流石の、

新編西遊記卷之十一
 果敢の事

口惜一とるさるこそ子の傍に身と片侍せむらふとも見えん
 と。活らぬ知らぬ千を希微碎の面と捲げの心をもく降もくも床
 中もと久八の縁を踏りておどろけし一はらへく久八の心も是を護
 申せしと形もはさし入るまの行もどやびの久八の傍一はらへて
 ろいづる天摩の見たり一かを恨め暇も流し流し後を言解
 う胸先あのなほく別れは言方承ませとまの不の知路に引
 摺りけしお氣のゆく涙とせに異見もする千吉の教せくも
 汁は免南に何の意も平久八は捨せし心激し双車の力拍倉
 にく幾回とかく折付のに必死の急死や実りり久吉郎若と
 一移魂消の景光道の傍と捲けお倒れ死せしに異かもどく久八

吐き出しけりしお驚まし。コハも弱き疲弱念ももつに意ありと
 常と氣絶るまら一と。懐せれき者今田の水を汲て口は
 入かしの極々に懐抱ありわいの史の息と疾速まを捨くの面に
 色の重り今も息絶たりも久八の天と仰て袂見し。物も我も
 秘せし形はつとあつた。コハは侍に捲き下候合ひはるゝ
 ら入るる救一の科何ぞ知せん今もこの御書ももこの御のた
 一。この決め鬼もも前もも務め候ゆる徳永左一郎もも亦文智
 の傍も入る。刻うてるの極末と。一昔はまのこのたれは下
 と定つた獲りて後に捲むも喘々左辭が家も却て對む
 心中とお解。逆もはさし命ももも。原もも西に物もも。と殺

司文友友卷之十一
 廿二
 辰米堂蔵版

大同政言卷之十五

せしに非ざる。一に口惜しく。自ら悔へて快く。... (Main text of the book)

大岡村井長菴調合机卷之十五

清額 南原先生編選
増訂 隸辭 中本
日本安藤龍淵先生増字

明清 高久露屋先生原摹
名家 巾箱畫譜 白紙摺
矢野西洲先生著

梅陵井澤先生著
新訂 漢畫指南
岡田良策先生編輯
山水之部二卷 人物花鳥之部二卷
四君子之部四卷 画法画論 二卷

近世名婦百人撰
伊藤靜齋先生圖画
此書は永年... (Detailed description of the book's content and history)

孝貞 岡田霞舟先生編輯
近世名婦傳

此書は永く東洋の婦人史を記し、その中で最も重要な部分である。又、その中に、我が國の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。又、その中に、我が國の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。

大岡 元岡維則先生編輯
哇藏根接柱

此書は、大岡の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。又、その中に、我が國の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。

春風日記 松村春輔大人著
安達吟光先生画

此書は、春風の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。又、その中に、我が國の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。

大岡 元岡維則先生著
村井長菴調合机

此書は、村井の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。又、その中に、我が國の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。

書肆 浅草三好町
七番地

聚榮堂 大川錠吉藏版

增訂 清顧 南原先生編選
日本安藤龍淵先生増字

此書は、清顧の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。又、その中に、我が國の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。

明清 高久露厓先生原摹
名家 巾箱畫譜 白紙摺
矢野西洲先生著

此書は、高久の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。又、その中に、我が國の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。

梅陵井澤先生著
新訂 漢畫指南
山水之部二卷 人物花鳥之部二卷
四君子之部四卷 画法画論二卷

此書は、梅陵の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。又、その中に、我が國の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。

近世名婦百人撰 岡田良策先生編輯
伊藤静齋先生圖画

此書は、近世の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。又、その中に、我が國の歴史を記し、その中で最も重要な部分である。

孝貞 岡田霞松先生編輯
近世名婦傳

此編ハ霞松先生の編纂となし、その中に
又の名婦年譜が載り、その中又の名婦の遺著、
又の名婦の書翰、又の名婦の肖像、又の名婦の
遺品、又の名婦の墓所、又の名婦の追善、
又の名婦の追慕、又の名婦の追憶、
又の名婦の追思、又の名婦の追慕、
又の名婦の追慕、又の名婦の追慕、

大岡政談 畦藏根接柱
伊藤静齋先生圖画

此編ハ大岡政談の根接柱の圖画、
伊藤静齋先生の圖画、
伊藤静齋先生の圖画、
伊藤静齋先生の圖画、
伊藤静齋先生の圖画、
伊藤静齋先生の圖画、
伊藤静齋先生の圖画、
伊藤静齋先生の圖画、

春風日記
安達吟光先生画

此編ハ春風日記の四編出版、
五編近刻、
二書房
合版

大岡政談 村井長菴調合机
伊藤静齋先生画

此編ハ村井長菴先生の著、
伊藤静齋先生の画、
伊藤静齋先生の画、
伊藤静齋先生の画、
伊藤静齋先生の画、
伊藤静齋先生の画、
伊藤静齋先生の画、
伊藤静齋先生の画、

書肆

浅草三好町 聚榮堂 大川錠吉藏版

忠勇阿佐倉日記
松亭金水作

本編ハ佐倉宗吾先生立し、終末に至るの事
歴且事に關する人負善惡其由来を詳し、
或は農民甲賀の能く悉諺の段宗吾將軍
家へ直訴し、竟に刑せしむ、鉄牛心に松虫
明神の奇瑞近海に載し、局を結ぶ、愛
顧の諸君、高覧と奉布也

玉蘭齋貞秀画

此編ハ世に名高き高木折重明と傳はる
くといふ、江湖の諸君にさぐる奇談珍説
さぐりあつと法書より抜萃し、且著者の
意を加へ、面白草紙あり卷をひくると
猶高評と奉願候

高木迺實傳
葛飾為齋画

此編ハ世に名高き高木折重明と傳はる
くといふ、江湖の諸君にさぐる奇談珍説
さぐりあつと法書より抜萃し、且著者の
意を加へ、面白草紙あり卷をひくると
猶高評と奉願候

林話 妙竹 七偏人
梅亭金鷲戯作

此編ハ世に流行する滑稽乃一部合せて
梅亭主人の最も秀作あり、一洗の清君実に
抱腹無類の可笑味あり、珍書ゆゑ、笑ふ
門ハ福来、春を妬め、乃福来、叶開、
怪も、愛顧と編に、者也

鴛齋画

此編ハ世に名高き高木折重明と傳はる
くといふ、江湖の諸君にさぐる奇談珍説
さぐりあつと法書より抜萃し、且著者の
意を加へ、面白草紙あり卷をひくると
猶高評と奉願候

大岡 あせ 岡維則編輯 近刻
 政談 あせ 畦藏根接柱 全部十冊
 伊藤藤静齋因再 聚榮堂梓

明治十五年十月六日御届
 同 年十月十日出版

編輯人 東京府平民 元岡徹太郎

出版人 同 浅草區浅草三好町七番地 大川錠吉

出像画工 同 區浅草西三筋町三十四番地 伊藤静齋

浄書 同 下谷區下谷西町一番地 大代葛屋

繡像刊字 同 深川區深川常盤町二丁目七番地 辰田長次郎

發賣書肆 同 浅草區浅草新 高梨彌三郎

大坂書肆 大坂本町四丁目 岡島真七

芝三島町 山中市兵衛

浅草廣小路 吉田久兵衛

横山町四丁目 辻岡文助

日本橋 通三丁目 小林鉄次郎

弥左門町 武田傳右衛門

浅草新福井町 五番地 高梨彌三郎

同三好町 七番地 大川錠吉

東 京 書 肆

